

令和7年度  
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業  
実施計画書（新規団体用）

活動団体の本事業での活動テーマ

『山10日海10日里10日

流域のめぐみでゆたかに暮らす屋久島の流域循環モデルづくり』

活動団体の活動地域：鹿児島県熊毛郡屋久島

活動団体名：合同会社モスガイドクラブ

中間支援主体名：NPO法人HUB&LABO Yakushima

# 参加団体の基本情報

## (1) 活動団体の基本情報

団体名	合同会社 モスガイドクラブ
活動地域	鹿児島県熊毛郡屋久島町
専門性・強み	
#リジェネラティブツーリズム #流域プログラム #環境再生 #森林再生 #耕作放棄地再生 #水の循環 #生態系と共生 #企業研修 #地域文化継承 #持続可能な地域づくり #自然と人の再接続	

団体の概要
2003年、屋久島でエコツアー事業を開始。観光の質と地域との関係性に向き合い、2006年にはオーバーツーリズムへの危機感から、里に拠点を移し「モスオーシャンハウス」を開設。自然と共に暮らし、学ぶ場づくりを進めてきた。企業研修や長期滞在型の流域プログラムを通じ、多様な価値観が交わる機会を創出。2020年にはSumu-yakushimaを建設し、持続可能な暮らしの拠点として世界的な評価を得た。現在は「流域のがっこう」設立に向け、自然環境と地域コミュニティの再生に挑んでいる。

## (2) 中間支援主体の基本情報

団体名	特定非営利活動法人HUB&LABO Yakushima
活動地域	鹿児島県熊毛郡屋久島町
専門性・強み	
#屋久島の自然を活かした実践的な環境教育・自然保護 #探究型学習・キャリア形成支援教育・人材育成 #地域と人をつなぐ仕組みをつくる地域づくり・コミュニティデザイン #創造的な思考と表現を重視した学びの場をつくるアート・創造活動	

団体概要
HUB&LABO Yakushimaは、「関係性をデザインすることで豊かさをアップデートする」をミッションに、「青い地球と共に生きる文化」の実現を目指すNPO法人です。環境教育や地域づくりを通じて持続可能な未来を共創するプラットフォームを構築。環境系学生未来塾、島子屋、ビーチクリーン、未来会議など多様な実践を展開しています。世界自然遺産・屋久島の地を生かし、人と自然、人と社会の関係性を再構築する学びと対話の場を育みながら、ローカルとグローバルの視点を行き来し、次世代に希望をつなぐ社会の創造に挑んでいます。

# 活動団体と地域の紹介

## 山から海までの流域全体を再生する学び×実践のフィールドづくり



屋久島は、森・里・海が世界一コンパクトに繋がる「流域」の全体性を体感できる島であり、かつては「山10日海10日里10日」と表現されるように、自然と共に暮らす環境文化が根付いていました。活動団体であるモスガイドクラブは、2018年から源流から海までをフィールドとする「流域プログラム」を展開し、自然資本にふれながら持続可能な暮らしを学ぶ機会を提供しています。観光が山間部に偏ることで生じる環境負荷や、里地の人手不足による自然環境の荒廃といった課題に直面し、流域全体の再生に取り組んでいます。今後は、地域の自然資源や文化を活かし、衣食住やエネルギーの循環を地域で担う「自立分散型の流域循環モデル」の構築を目指し、地域内外の多様な主体と共に、持続可能な暮らしの再生と地域循環共生圏の実現に取り組んでまいります。

# 活動団体の目指す地域の姿

## ■地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

「山10日海10日里10日」流域のめぐみでゆたかに暮らす屋久島の流域循環モデルづくり

## ■地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

屋久島では、山・里・海が一体となった流域ごとに独自の生活圏や生業が育まれてきた歴史がある。行政区では捉えきれない自然と暮らしのつながりを重視し、本事業では「流域」を活動単位として設定。高平流域を起点に多様な主体と連携し、各管理セクターのキーパーソンとの関係性を構築。役割分担と協働体制が整い、共通のビジョンに基づく持続的な活動が展開される地域プラットフォームが形成されつつある。

## ■ローカルSDGs事業として取り組む内容

### ○高平日曜市の活性化

棚田を復元しビオトープとして機能させ、森里川海の物質循環をつなぐ中間地点を回復し、耕作放棄地を再生する。また、農作物を地域の日曜市で販売し流域自給率の向上を目指す。農地を持たない移住者も巻き込み、人材循環へとつなげる。

### ○リジェネラティブツアー勉強会および企画WSの実施

高平流域を起点に、源流域を含む森・里・川・海における資源循環と水環境との共生を体験できるツアープログラム「流域のがっこう」を創出するプロジェクト。

## ■地域の現状と課題

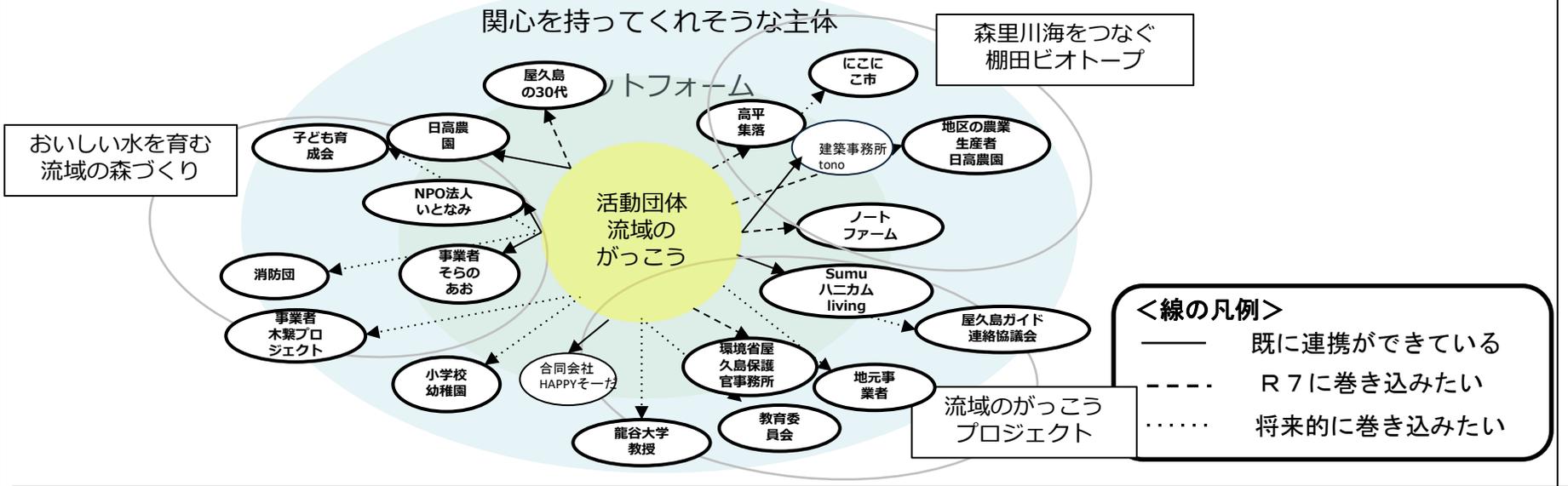
【高平流域の現状と資源】 高平流域では、戦後に植林された杉林の荒廃や保水力の低下による小川の枯渇、農地の放棄や鳥獣被害の増加、山との関わりの減少、高齢化による管理負担の増大など、環境と暮らしの両面で多くの課題を抱えている。商店や飲食店の不在、住居の分散による集まりづらさも、日常生活の不便さを生んでいる。一方で、開拓集落ならではのフロンティア精神や新たな挑戦を受け入れる文化、Uターンやアイターン者の増加、豊かな水資源、子どもの多い育成会の存在など、地域再生の可能性を感じさせる資源も多く存在している。

【屋久島島内の現状と資源】 屋久島全体でも人口減少と高齢化が進行し、2045年には人口が7,000人を下回る可能性がある。これに伴い税収が減少し、交通や水道などインフラの維持が困難になりつつある。加えて、環境負荷の高い観光業の持続性や若者流出による人材不足、気候変動による自然災害リスクの高まりも深刻な課題である。しかし一方で、世界遺産登録以降に育まれてきた「自然と共に生きる」意識は、職人や農漁業者、観光ガイド、環境保護活動家、教育者、移住者など多様な人々に受け継がれている。「屋久島憲章」を実践する動きも広がり、地域の魅力を次世代につなげようとする連携が着実に高まりつつある。

# 2.地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み 及び実現したいローカルSDGs事業

## ■地域に必要なプラットフォームのイメージ

※団体ごとの役割やカテゴリーが分るよう、下図を参考に記入ください（記載例どおりでなくても構いません）。



**地方公共団体との今後の関わり** 屋久島町のビジョンである屋久島憲章の具現化を実現するため、屋久島町農林水産科などと対話を進めながら、課題の深堀りなど一緒に検討していける関係性を築くため、まずは定期的に情報交換をすることから始める。

## ■実現したいローカルSDGs事業

	検討しているローカルSDGs事業（最大3つまで）	地域の環境・経済・社会に起こしたい変化 ※地域課題解決とのつながりを考慮して記載
①	流域の持続可能な営みを再生するリジェネラティブツアー「流域の がっこう」プロジェクト	環境：森・里・海のつながりを意識した資源循環の理解促進と、水環境保全への意識向上 経済：地域の自然資源や文化を活かしたリジェネラティブツーリズムの創出による観光産業の活性化 社会：地域住民や観光客が流域の自然と共生する知恵を学ことによる持続可能な地域づくりへの関心の向上
②	流域の持続可能な営みを再生するリジェネラティブツアー「流域の がっこう」プロジェクト	環境：棚田の復活による生態系の多様性回復と、水源涵養機能の向上による森・里・川・海の物質循環の促進 経済：地域の日曜市での農作物販売による流域自給率の向上と、地元経済の活性化 社会：移住者の農業参入支援による次世代の農業従事者の育成と、地域コミュニティの活性化

# 3カ年状態目標

## ■2027年度末の状態目標

### 状態目標：持続可能な地域循環モデルの確立と拡張

- 森里川海をつなぐ「自立分散型の流域循環モデル」が定着し、地域内外のステークホルダーが継続的に関与。
- プログラムの質が洗練され、島外からの人材・知見・資金の循環が生まれ、モデルが他地域にも波及可能な形へ。
- 地域の子どもや若者が関与する仕組みが確立し、次世代への継承が進む。

## ■2026年度末の状態目標

### 状態目標：協働の定着とローカルSDGs事業の本格展開

- 関係者のネットワークが継続的な連携体制として機能し始め、流域プラットフォームとしての輪郭が明確化。
- 棚田ビオトープ・日曜市・環境教育ツアー等を通じた複数の実践型事業が展開され、地域住民と来訪者が交わる場が増加。
- 課題マップをもとに、優先課題に対する具体的なアクションプランを複数形成。

## ■2025年度末の状態目標

### 状態目標：関係性の再構築と共通ビジョンの形成

- 地域に関わる多様な主体（農家、観光業者、教育者、行政、移住者など）と連携を開始し、キーパーソンとの関係性を構築。
- ワークショップや対話の場を通じて「流域」の共通理解を深め、流域ビジョンを共有する土壌を醸成。
- 「流域のがっこう」WSや棚田整備、日曜市の企画など、実践と学びを結びつけた共創活動を複数実施。

# 中間支援主体のありたい姿

## ■中間支援主体としての獲得目標

活動団体とともにプロジェクトを推進しながら、「人と地域」「人と自然」をつなぐ中間支援機能を強化し、持続可能な未来の創造を目指し、地域ネットワークの強化、次世代育成、資金調達モデルの確立、情報発信力の向上に取り組みます。地域課題に対する実践型プログラムを展開することで、地域の資源や資源を活かした持続可能なビジネスモデルの確立を図ります。屋久島の特性を考慮した取り組みを全国へ展開し、\*\*持続可能な社会の実現に貢献する「つながりを生むエコシステム」\*\*地域として、取り組む中間支援組織としての成長を目指します。

## ■中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

HUB&LABO Yakushimaは、ビジョンである「青い地球とともに生きる文化」の実現を目指し、地域循環共生圏の概念を取り入れながら、屋久島をHUBとして世界につながる持続可能な地域づくりを推進します。さらに、地域の人々が主体的に関わり、地域外の資源や知恵が循環する仕組みを作ることで、より持続可能な社会の形成を支えます。

本事業終了後も、流域地域をつなぐ多様な主体（山岳部の世界地域遺産を管理する環境省、里山を守る林野庁、島民の生活を支える屋久島町、地域をつくる住民・企業、次世代を育む教育機関）を結び付ける「ハブ（中間支援組織）」としての役割を強化し、地域内外の資源・知恵の循環を促進します。地域課題に対する共創の場づくり、環境教育、エコツーリズム、持続可能なビジネスモデルの確立を推進しながら、環境保全と地域経済発展の両立を目指します。屋久島の観光資源を活用しながら、訪問者が環境に配慮した行動をとれる仕組みを導入し、地域にとって持続可能な観光モデルの確立にも取り組んでいきます。

また、地域内でのつながりを強化するだけでなく、屋久島での実践事例を発信し、他地域や政策の潮流と連携することで、全国・世界の持続可能な地域づくりに貢献していきます。他地域の成功事例を学びつつ、屋久島ならではの強みを活かし、さらに企業や教育機関との連携を確立し、地域外からの資源やアイデアを取り入れることでESD（持続可能な開発のための教育）を推進することで地域循環共生圏の着実な発展を目指します。

これらの取り組みから、持続可能な社会の実現に向けた更なる「中間支援組織＝つながりを生むエコシステムの中核」として機能し、地域循環共生圏のさらなる発展を目指していきます。

# 中間支援主体の支援・取組計画

## ■中間支援主体の1年間の支援目標

地域を流域ととらえ、流域全体のステークホルダーを巻き込むことで地域プラットフォームを機能させ、関係者が継続的に対話・協働できる環境をつくる。また、流域全体の地域課題をより深掘って整理し関係性を可視化することで、課題解決に向けた具体的なアクションを創出する。流域ビジョンを作成し、地域内外のステークホルダーの共感を得ることによって、その後のローカルSDGs事業創出に向けて意識醸成を図れている状態を目指す。

## ■支援計画

	活動団体の取組における現状と課題 (見立て)	課題を解決するために必要と考える手段 (打ち手)
①	想定している地域プラットフォームは屋久島の山、里、海の全てに関わるため、関わる主体は多岐に渡る。課題として、各エリアを管理するセクターへの声かけ、対話とヒアリングによる地域の現状・課題の深掘りを行う必要がある。	屋久島の「山・里・海」に関わる多様な主体と連携し、各エリアの管理セクターとの対話を深めるために、各エリアのキーパーソンを特定しながら公式・非公式の場で意見を収集する。流域のがっこうWSも活用しながら、関係者との接点を増やす対話の場を作り、地域プラットフォームでの連携でどのような利害関係が構築できていくかを考えてもらうようにする。
②	活動団体が現時点で描いているビジョンのブランドコンセプト「流域」が流域地域プラットフォーム全員の共通言語ではない。課題として地域の関係者との共通体験や対話を重ねながら地域の関係者が共感できる「地域のありたい姿＝ビジョン」として作り上げる必要がある。	ステークホルダーとの対話の場を作りながら、「流域」の概念をわかりやすく伝える資料や事例を提供し、共通言語の醸成を支援する。次に、関係者同士が共通体験できるフィールドワークやワークショップを企画し、対話を深める。さらに、ビジョン共創の場を設計し、多様な意見を反映しながら合意形成を促進する。
③	流域全体の地域課題は複雑であり、因果関係が複雑に絡み合っているのが現状である。流域全体の地域課題繋がりから全体像を把握し、課題を解決する多様なアクションに結びつけ、ローカルSDGs事業と繋げていく必要がある。	流域全体の課題の発生関係を整理するため、ヒアリングをもとに活動団体やステークホルダーと協力しながら課題マップを作成する。ワークショップや対話の場で、課題のつながりを整理し、優先的に取り組むべきテーマを特定する。解決策の検討では、地域や島外企業と連携し、多様なアクションへ取り組む。さらに、地域の主体と協働するローカルSDGs事業を目指し、持続可能な形での事業化を推進する対話の場をつくる。

# 活動・支援スケジュール

## ■スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
プラットフォーム構築のための取組【活動団体】			★関係者ヒアリング	★関係者ヒアリング		★9/8 ステークホルダーキックオフ ミーティング				★1/17 ステークホルダー ミーティング 流域未来会議		
ローカルSDGS事業創出に向けた取組【活動団体】		★5/13 流域のがっこう スタッフ勉強会				★9/8 流域のがっこうWS		★11/18 流域のがっこうWS				
中間支援主体の支援・取組計画												

備考（補足説明など必・ステークホルダーミーティングは年2会としているが、適宜対話を深めながら複数回実施する。  
 ・流域のがっこうWSでは、専門家を招きながらブランドコンセプト「流域」の価値を学ぶワークショップを開催しながら、山・里・海のつながりの重要性を可視化する。要な場合は記載）